

5.4.4 新浜地区

(1)新浜地区における物理特性

(1)-1 概要

新浜地区の護岸の状況を図 5.4.4-1 に示す。

新浜地区の陸上部については、北側に「新浜緑地運動広場」が整備され、南側に向けて護岸沿いに遊歩道が整備されている。南側の No.6 と No.7 が位置する護岸は工業用地となっている。

新浜地区の外洋側(西側)に面する護岸は、北側が直立護岸となっており、南側が傾斜護岸で消波ブロックが設置されている(図 5.4.4-2)。消波ブロックにはテトラポットが使われ、南側の約 200m の区間は小型のものが使われている。なお、北側は大津川河口に面している。

(1)-2 護岸の基盤について

新浜地区の護岸は、消波ブロックと被覆石が使われた傾斜護岸となっており、これらの消波ブロックもしくは被覆石が岩礁性の海藻の着生基盤として活用できる(図 5.4.4-3)。傾斜護岸の法尻の水深は北側が 13m 程度、南側が 7m 程度と北側ほど水深が深くなっている。

なお、法尻付近の被覆石上に砂泥等が堆積していることが確認されている(図 5.4.4-4)。浮泥等が堆積されている箇所では岩礁性の海藻が着生し難いため、藻場造成を行う場合には、高さを確保した新たな基盤の設置や砂泥の除去などの対策が必要となる。

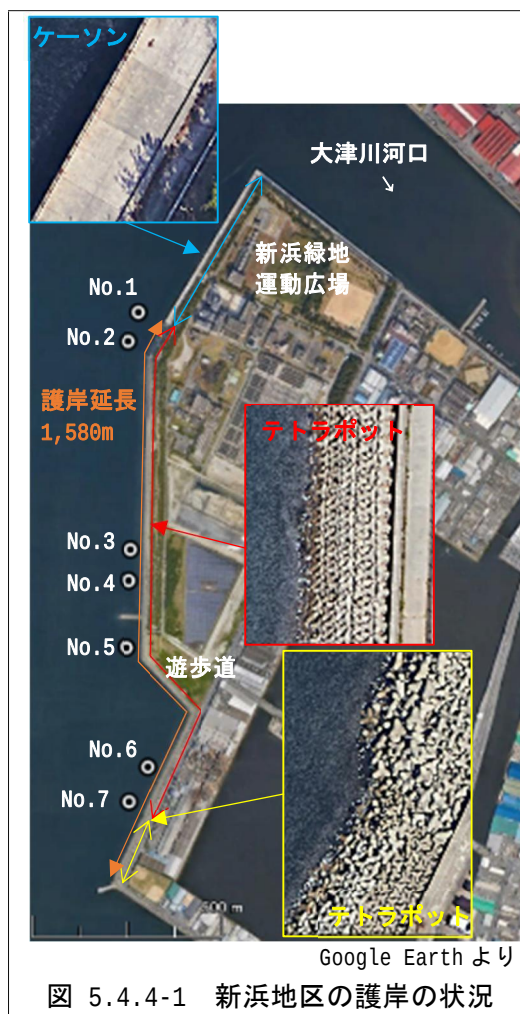


図 5.4.4-1 新浜地区の護岸の状況

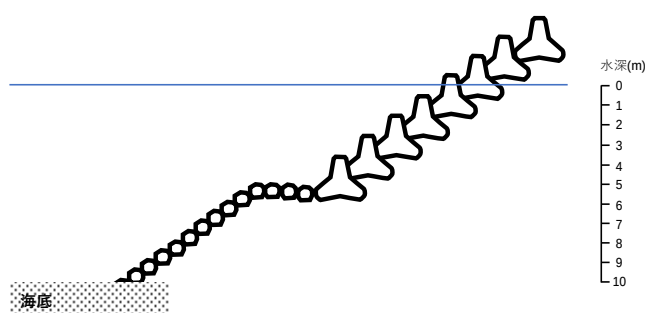


図 5.4.4-2 新浜地区の護岸断面の模式図

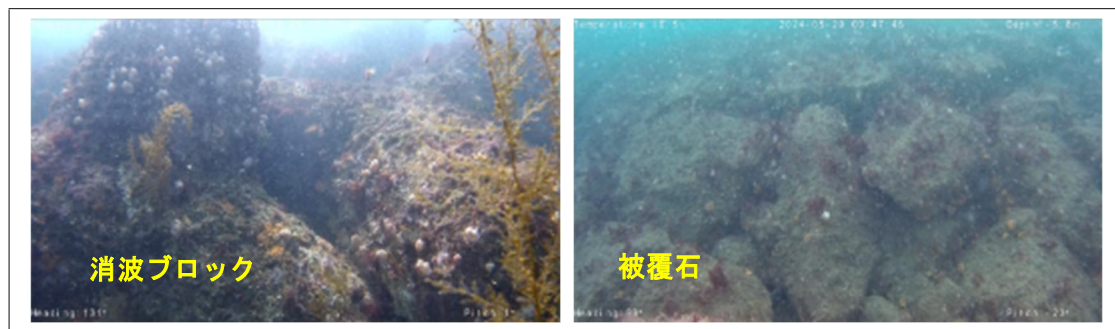


図 5.4.4-3 新浜地区の護岸の海中の状況

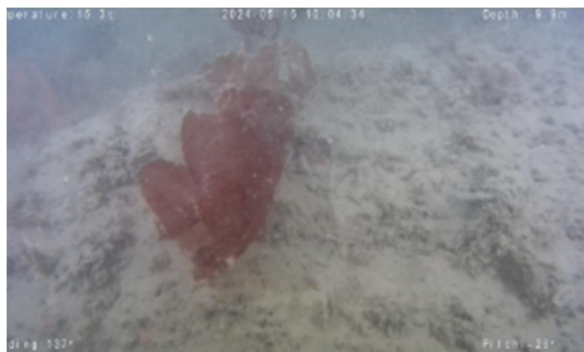


図 5.4.4-4 被覆石上への砂泥の堆積

(2)新浜地区の出現海藻種

新浜地区では、護岸部に岩礁性の海藻が繁茂し、大型海藻ではワカメ、シダモク、タマハハキモク(図 5.4.4-5(1))、小型海藻では紅藻類のカパノリ、シキンノリ、ソゾ類、フクロノリ、ムカデノリ、ヤハズグサ、有節サンゴモ類が出現した(図 5.4.4-5(2))。

ワカメ、シダモク、タマハハキモクの各地点での出現水深と被度を図 5.4.4-6 に示す。

ワカメは、護岸の北側の No.1 と No.2 を除く範囲の水深 0.2～6.0m に濃生な分布がみられ、点生・極点生であれば水深 8.1m 程度までみられた。No.1 と No.2 ではワカメがほとんど出現していない。本調査では降雨後に表層塩分が No.1 で 20 程度、No.2 で 25 程度まで低下しており、新浜地区北側には大津川河口があり、直立護岸と同じ方向に面する No.1 と No.2 では大津川からの出水の影響を直接受けている可能性がある。

タマハハキモクは、極点生もしくは点生と被度が低いものの、観察した 7 地点のうち 3 地点で確認され、水深は 1.5～5.5m の範囲であった。

シダモクは点生もしくは極点生と被度が低いものの、観察箇所の 7 地点のうち 3 地点で確認され、水深は 2.6～5.5m の範囲であった。

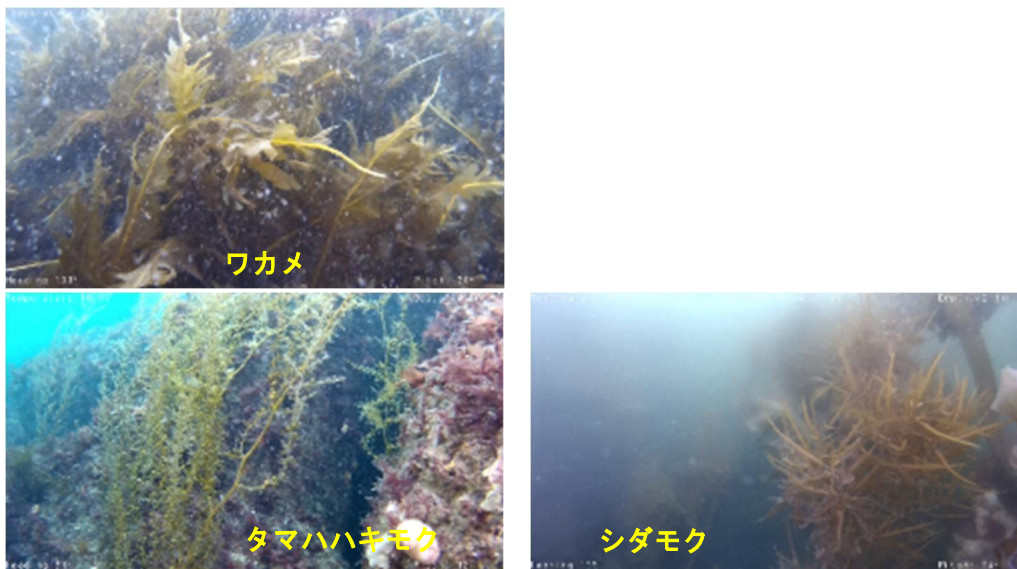


図 5.4.4-5(1) 新浜地区でみられた大型海藻

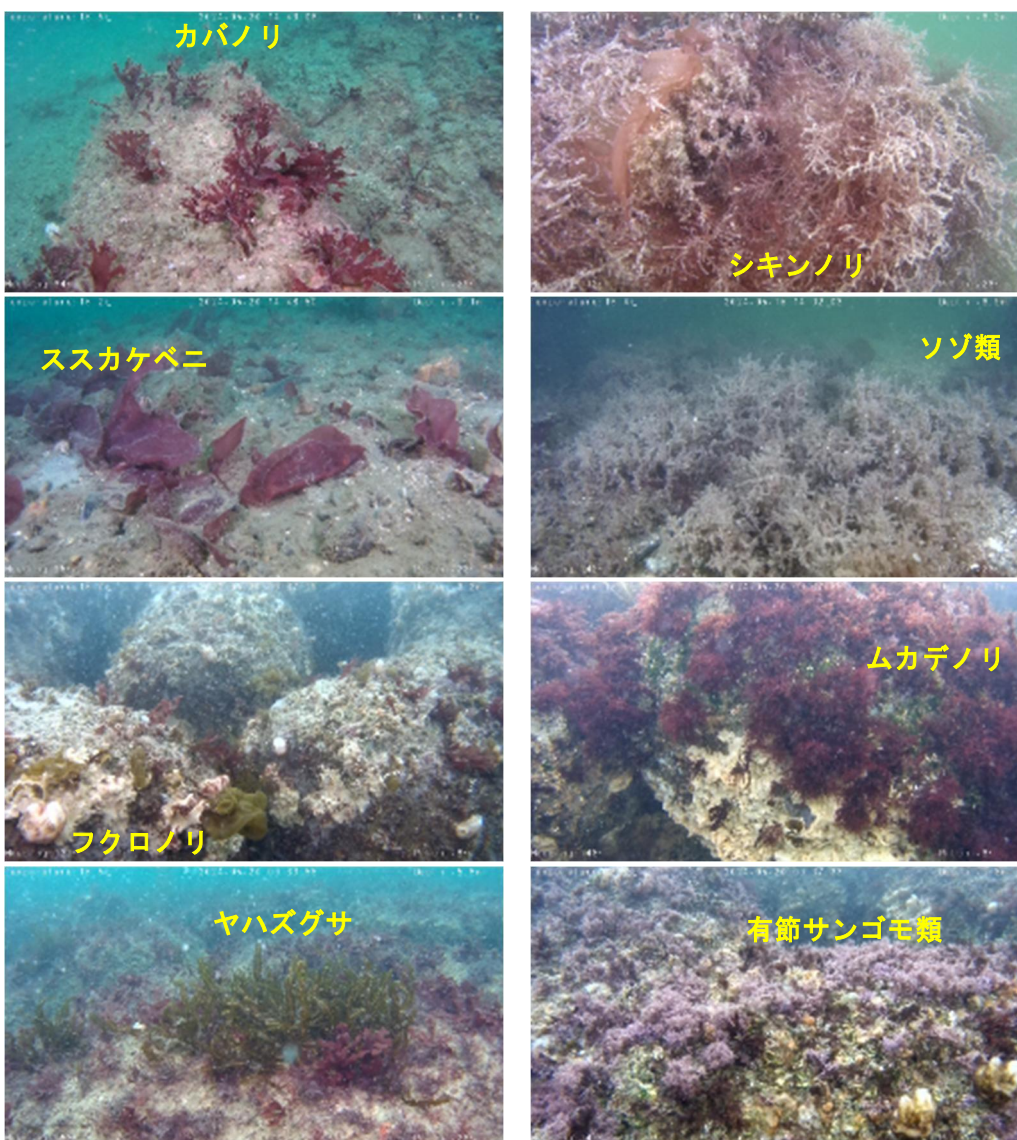
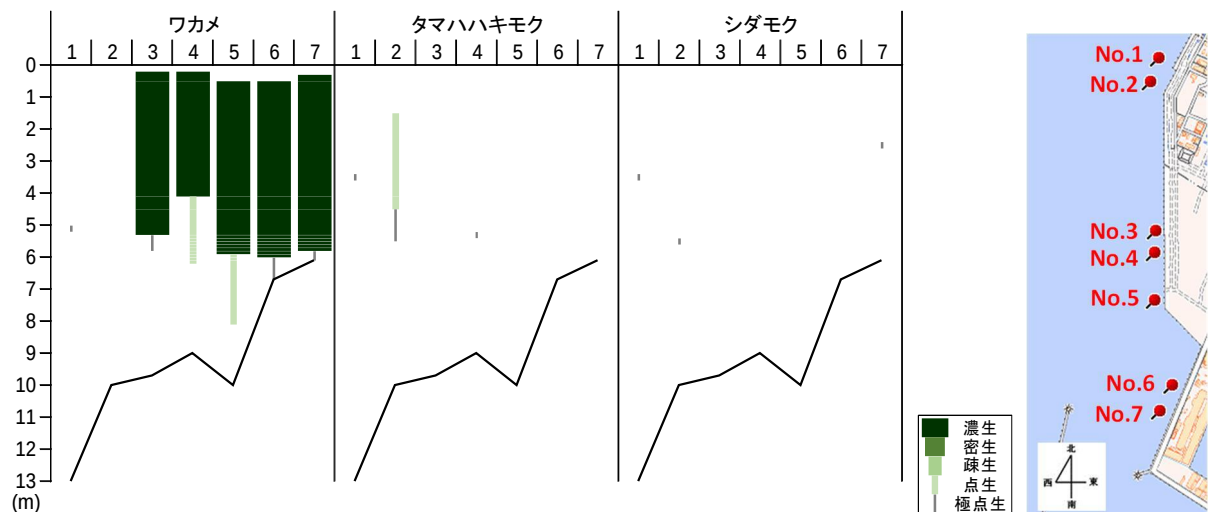


図 5.4.4-5(2) 新浜地区でみられた主な小型海藻



黒折れ線：概ねの法尻水深、斜線は一部砂泥の堆積がみられたことを示す。

図 5.4.4-6 新浜地区で出現した大型海藻の出現水深

(3)新浜地区の水環境

(3)-1 現地調査結果及び公共用水域水質調査結果(大阪府)

本調査結果（2024 年 5 月 15・20 日）及び新浜地

区近傍の大阪府の公共用水域水質調査の C-5(図 5.4.4-7)の調査結果（2013 年 4 月～2023 年 3 月）を用いて、各海藻類の生存・生育条件の範囲と比較した。

ワカメ、シダモク、タマハハキモク、アカモク、カジメの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果を表 5.4.4-1(1)～(4)に示す。また、図 5.4.4-8～図 5.4.4-13 に公共用水域水質調査及び本調査での測定・分析結果を示す。

①ワカメ

ワカメの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果を表 5.4.4-1(1)に示す。

水温は、春から秋にかけて、公共用水域水質調査結果において表層では夏季(7～8 月)では遊走子期の生存水温の基準(30℃)以上とすることがあった。なお、夏季には配偶体期の生育の上限水温 31℃未満に収まっている。また、秋から春にかけては、公共用水域水質調査、本調査ともに葉体(孢子体)期の生存水温の基準(2～26℃)の範囲内にあった。

塩分は、公共用水域水質調査及び本調査ともに生存・生育条件の下限(9 もしくは 15)を下回ることがなかった。

光条件に関しては、水面に対する水中光度がワカメの生育の基準値(20%以上)となる水深は、本調査では水深 2～3m であったが、公共用水域水質調査では、水深 1.6～20.2m(深い側の 75%値を取ると水深 8.0m)の範囲であった。なお、新浜地区のワカメの出現水深の下限は水深 8m であるため、概ね公共用水域水質調査の範囲と合致している。

COD は、表層は公共用水域水質調査、本調査ともに養殖漁場・天然漁場となる環境の基準値(2mg/L

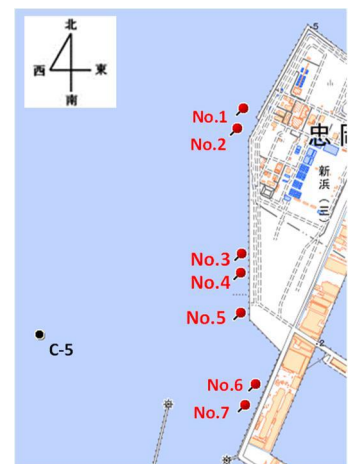


図 5.4.4-7 本調査の調査地点 (No.1～7)と公共用水域水質調査の調査地点(S-5)

以下)より高い値で推移し、底層は公共用水域水質調査では基準値前後で推移した。

栄養塩類のうち、亜硝酸性窒素+硝酸性窒素は公共用水域水質調査及び本調査で養殖可能となる水温の基準値(0.28mg/L 以上)より概ね低い値で推移した。無機性窒素は公共用水域水質調査ではワカメの色落ちの基準値(0.028mg/L 以上)より高い値で推移したが、本調査で基準値より低くなった。りん酸性りんでは、公共用水域水質調査では概ねワカメの色落ちの基準値(0.0031mg/L 以上)程度で推移し、本調査でも概ね色落ちの基準値より高い値となった。

以上より、当海域はワカメの養殖水準(COD)について通年を通して満たすわけではないが、表層での高水温も一時的なものであるとみられ、生存・生育は可能な水質環境であると考えられる。但し、新浜地区のNo.1とNo.2ではワカメがほとんど出現しておらず、大津川河口に位置することと、No.1とNo.2の河口側にある鉛直護岸と同じ面となっており、出水による影響を受けている可能性があることから、No.1とNo.2の位置する護岸では注意が必要である。

表 5.4.4-1(1) ワカメの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果

項目	ワカメの 生存・生育条件※1	公共用水域水質調査		本調査	
		測定層	C-5 2013年4月～2023年3月	測定層	No.1～No.7 2024年5月15・20日
集計期間	—	—	—	—	—
水温※2	26℃未満(胞子体幼体期)	表層	春～秋:18.4～30.6℃	全層	15.6～19.7℃
	2℃以上(胞子体幼体期)		秋～春:7.6～20.9℃		
	30℃未満(胞子体成熟期)	底層	春～秋:17.2～28.8℃		
	30℃未満(遊走子期)		秋～春:7.6～18.3℃		
塩分	15 以上(胞子体期、配偶体期)	表層	20.6～32.8	全層	19.6～32.1
	9 以上(遊走子着生期)	底層	29.2～34.1		
相対光量	20%以上 (該当水深(m))※3	—	1.6～20.2m (深い側 75%値:8.0m)	—	2～3m
COD	2mg/L 以下 (養殖・天然漁場)	表層	1.6～7.8mg/L	1/2m層	1.5～4.1mg/L
		底層	1.1～4.5mg/L		
栄養 塩類	亜硝酸性窒素 +硝酸性窒素	表層	<0.01 ～0.31 mg/L	1/2m層	<0.01mg/L
		底層	<0.01 ～0.23 mg/L		
	無機性窒素	表層	<0.01 ～0.41 mg/L	1/2m層	<0.01～0.01mg/L
		底層	<0.01 ～0.37 mg/L		
りん酸性りん	0.0031mg/L 以上 (色落ちの下限)	表層	<0.003～0.052mg/L	1/2m層	0.007～ 0.014mg/L
		底層	<0.003～0.088mg/L		

※1: 既往知見による 水温・塩分・光量は生存条件を、COD・栄養塩類は生育条件を示す。

※2: 水温は、公共用水域水質調査については、時期を春～秋: 6月～11月、秋～春: 12月～5月の期間で集計した。

※3: 相対光量(水面光量に対する水中光量の比率)は、20%以上となる水深を示す。公共用水域水質調査については透明度からの推定値を、本調査は測定値を示す。

②シダモク、タマハハキモク、アカモク

シダモク、タマハハキモク、アカモクの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果を表 5.4.4-1(2)～(4)に示す。

水温は、表層では公共用水域水質調査でシダモクとアカモクの生活史全体、タマハハキモクの発芽期の水温の基準値(30℃)より高い値が夏季(8月)にみられ、底層及び本調査でこの範囲に収まっていた。表層では 30℃以上となる水温がみられ、底層でも 29℃近くになることもみられることから、今後の水温変化には注意が必要である。

塩分は、公共用水域水質調査及び本調査で、シダモクとアカモクの生活史全体、タマハハキモクの発芽期の基準値(16)以上となった。

光条件は、本調査では天候が曇(雲量 10)から晴であったため、海面光量の高い地点(No.1とNo.5)をみると(図 5.4.4-15)、シダモクの幼体期の基準値(25 $\mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$)、タマハハキモクの幼体期の

基準値($50 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$)、アカモクの幼体期の基準値 $10 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$ と幼体期 $25 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$)となる光量は水深 10m 以深でみられた。

アカモクについて、COD と栄養塩類等の基準値とみると、COD は表層では概ね養殖水準の 2.2mg/L 以上、底層では 2.2mg/L 程度で推移し、硝酸性窒素やりん酸性りんは概ね適条件に該当し、アンモニア性窒素は発芽に影響のない 10mg/L 以下となった。

以上より、当海域は表層ではアカモクの養殖水準(COD)を満たさず、また、高水温の影響を受ける可能性があるため、水深帯によってはシダモク、タマハハキモク、アカモクの生存・生育は可能な水質環境であると考えられる。なお、ワカメの分布にみられるように No.1 と No.2 の位置する面の護岸は出水の影響を受ける可能性があり、注意が必要である。

表 5.4.4-1(2) シダモクの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果

項目	シダモクの生存・生育条件※1	公共用水域水質調査		本調査	
		測定層	C-5	測定層	No.1～No.7
集計期間	—	層	2013年4月～2023年3月	測定層	2024年5月15・20日
水温	30°C 以下(生活史全体)	表層	$7.6\sim30.6^\circ\text{C}$	全層	$15.6\sim19.7^\circ\text{C}$
		底層	$7.6\sim28.8^\circ\text{C}$		
塩分	16 以上(生活史全体)	表層	$20.6\sim32.8$	全層	$27.3\sim31.7$
		底層	$29.2\sim34.1$		
光量	$25 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$ 以上(幼体期)	—	—	全層	$2.7\sim2337.3 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$

※1：既往知見による

表 5.4.4-1(3) タマハハキモクの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果

項目	タマハハキモクの生存・生育条件※1	公共用水域水質調査		本調査	
		測定層	C-5	測定層	No.1～No.7
集計期間	—	層	2013年4月～2023年3月	測定層	2024年5月15・20日
水温	30°C 以下(発芽期)	表層	$7.6\sim30.6^\circ\text{C}$	全層	$15.6\sim19.7^\circ\text{C}$
		底層	$7.6\sim28.8^\circ\text{C}$		
塩分	16以上(発芽期)	表層	$20.6\sim32.8$	全層	$27.3\sim31.7$
		底層	$29.2\sim34.1$		
光量	$50 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$ 以上(幼体期)	—	—	全層	$2.7\sim2337.3 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$

※1：既往知見による

表 5.4.4-1(4) アカモクの生存・生育条件範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果

項目	アカモクの生存・生育条件※1	公共用水域水質調査		本調査	
		測定層	C-5	測定層	No.1～No.7
集計期間	—	層	2013年4月～2023年3月	測定層	2024年5月15・20日
水温	30°C 以下(生活史全体)	表層	$7.6\sim30.6^\circ\text{C}$	全層	$15.6\sim19.7^\circ\text{C}$
		底層	$7.6\sim28.8^\circ\text{C}$		
塩分	16以上(生活史全体)	表層	$20.6\sim32.8$	全層	$19.6\sim32.1$
		底層	$29.2\sim34.1$		
光量	$10 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$ 以上(幼体期)	—	—	全層	$2.7\sim2337.3 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$
	$25 \mu\text{mol}/(\text{m}^2\cdot\text{s})$ 以上(幼体期)	—	—		
COD	2.2mg/L 以下(養殖・天然漁場)	表層	$1.6\sim7.8\text{mg/L}$	1/2m層	$1.5\sim4.1\text{mg/L}$
		底層	$1.1\sim4.5\text{mg/L}$		
栄養塩類	硝酸性窒素 $0.001\sim0.064\text{mg/L}$ (適条件)	表層	$<0.01 \sim 0.31 \text{mg/L}$	1/2m層	$<0.01\text{mg/L}$
		底層	$<0.01 \sim 0.23 \text{mg/L}$		
	アンモニア性窒素 10mg/L 以下(発芽影響)	表層	$<0.01 \sim 0.10 \text{mg/L}$	1/2m層	$<0.01\sim0.01\text{mg/L}$
		底層	$<0.01 \sim 0.33 \text{mg/L}$		
	りん酸性りん $0.003\sim0.040\text{mg/L}$ (適条件)	表層	$<0.003\sim0.052\text{mg/L}$	1/2m層	$0.007\sim0.014\text{mg/L}$
		底層	$<0.003\sim0.088\text{mg/L}$		

※1：既往知見による

③カジメ

カジメの生存・生育条件の範囲と公共用水域水質調査及び本調査の結果を表 5.4.4-1(5)に示す。

水温は、表層では公共用水域水質調査で生存条件の水温の基準値(26℃)より高い値が夏季(7～9月)にみられた。底層では概ねこの範囲に収まっているものの、8月や9月に26℃以上となることが時折あり、気候変動等による今後の水温変化には注意が必要である。

塩分は、表層では公共用水域水質調査で生息条件の基準値(25)より低い値が夏季(7～8月)にみられた。底層では基準値以上で推移した。

透明度より求めた分布下限水深は、4.6～6.0m となっており、概ね水深 5～6m の範囲で推移した。

COD は概ね養殖水準となる 1.3mg/L 以上で推移した。

以上より、当海域はカジメの養殖水準(COD)を年間満たすわけではなく、表層では高水温・低塩分の影響を、底層では光量不足の影響を受ける可能性があることから、水深帯によっては生存・生育は可能な水質環境があるものの水質環境の変化には注意が必要であると考えられる。なお、ワカメの分布にみられるように No.1 と No.2 の位置する面の護岸は出水の影響を受ける可能性があり、注意が必要である。

表 5.4.4-1(5) カジメの生存・生育条件と公共用水域水質調査及び本調査の結果

項目	カジメの生存・生育条件 ※1	公共用水域水質調査		本調査	
		測定層	C-5 2013年4月～2023年3月	測定層	No.1～No.7 2024年5月15・20日
水温	26℃以下(胞子体期)	表層	7.6～30.6℃	全層	15.6～19.7℃
		底層	7.6～28.8℃		
塩分	25以上(胞子体期)	表層	20.6～32.8	全層	19.6～32.1
		底層	29.2～34.1		
透明度 (分布下限水深)	分布下限水深=年間平均 透明度÷定数※2 (胞子体期)	—	4.6～6.0m (月調査)	—	—
COD	1.3mg/L 以下 (養殖・天然漁場)	表層	1.6～7.8mg/L	1/2m層	1.5～4.1mg/L
		底層	1.1～4.5mg/L		

※1：既往知見による

※2：定数=0.66:気象庁大阪の日射量平年値と菱田ほか(1978)の大阪湾の減衰係数に関する知見から算出

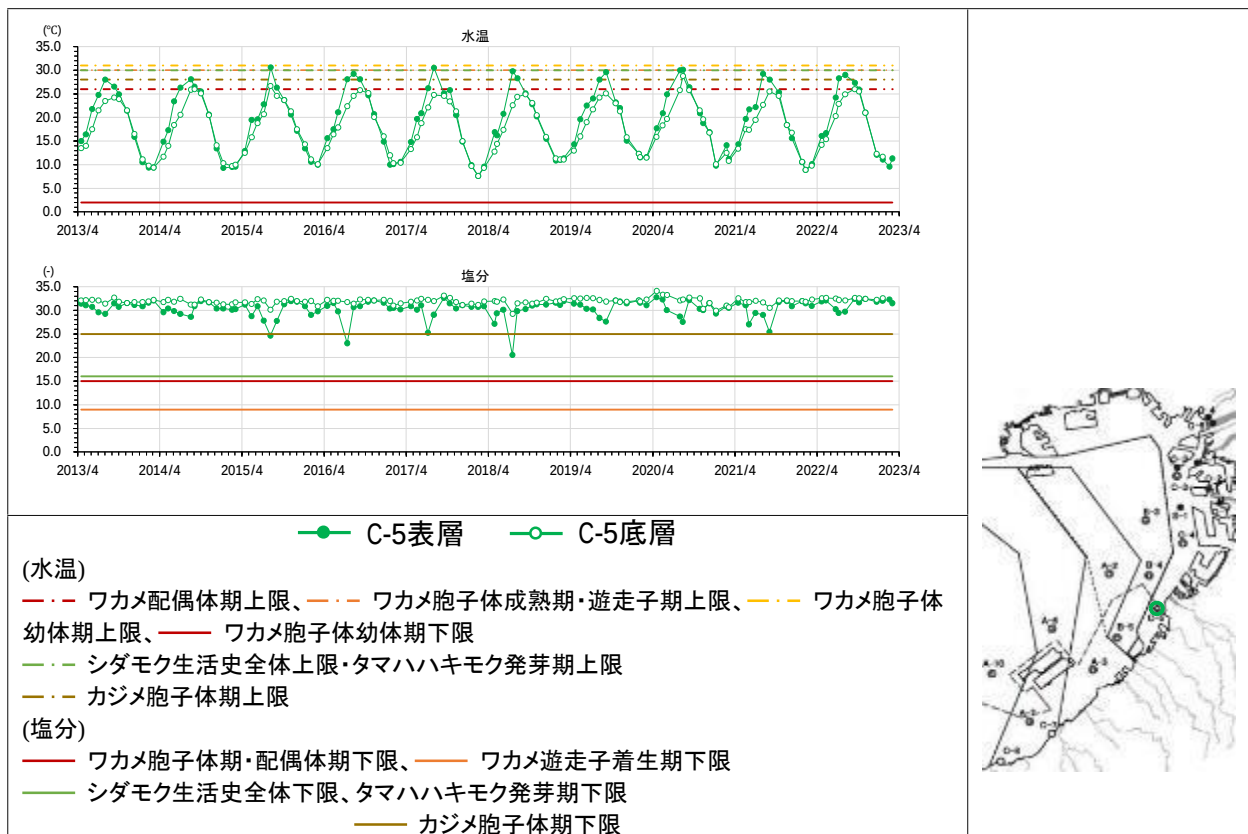


図 5.4.4-8 新浜地区近傍の大阪府公共用水域水質調査のC-5における水温・塩分の推移とワカメ、シダモク(アカモク)、タマハハキモク、カジメの生存・生育条件

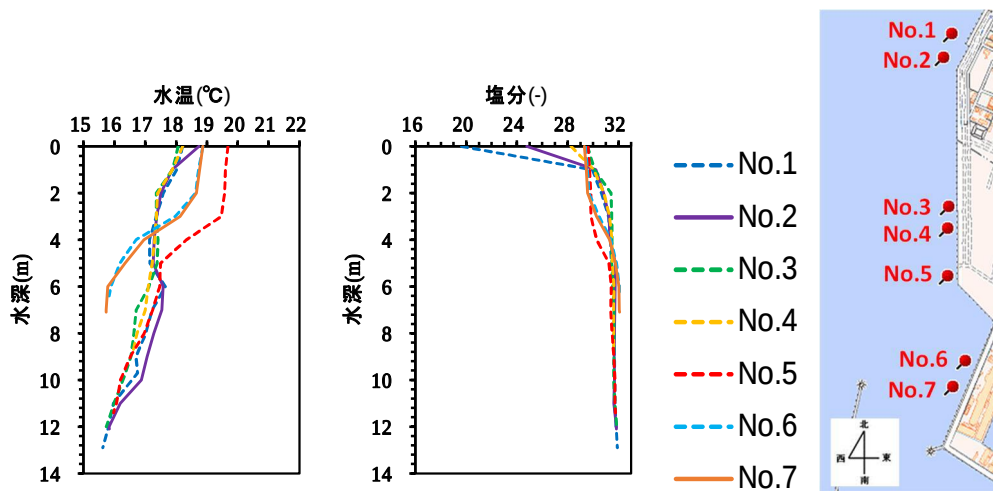


図 5.4.4-9 新浜地区における本調査の水温・塩分測定結果

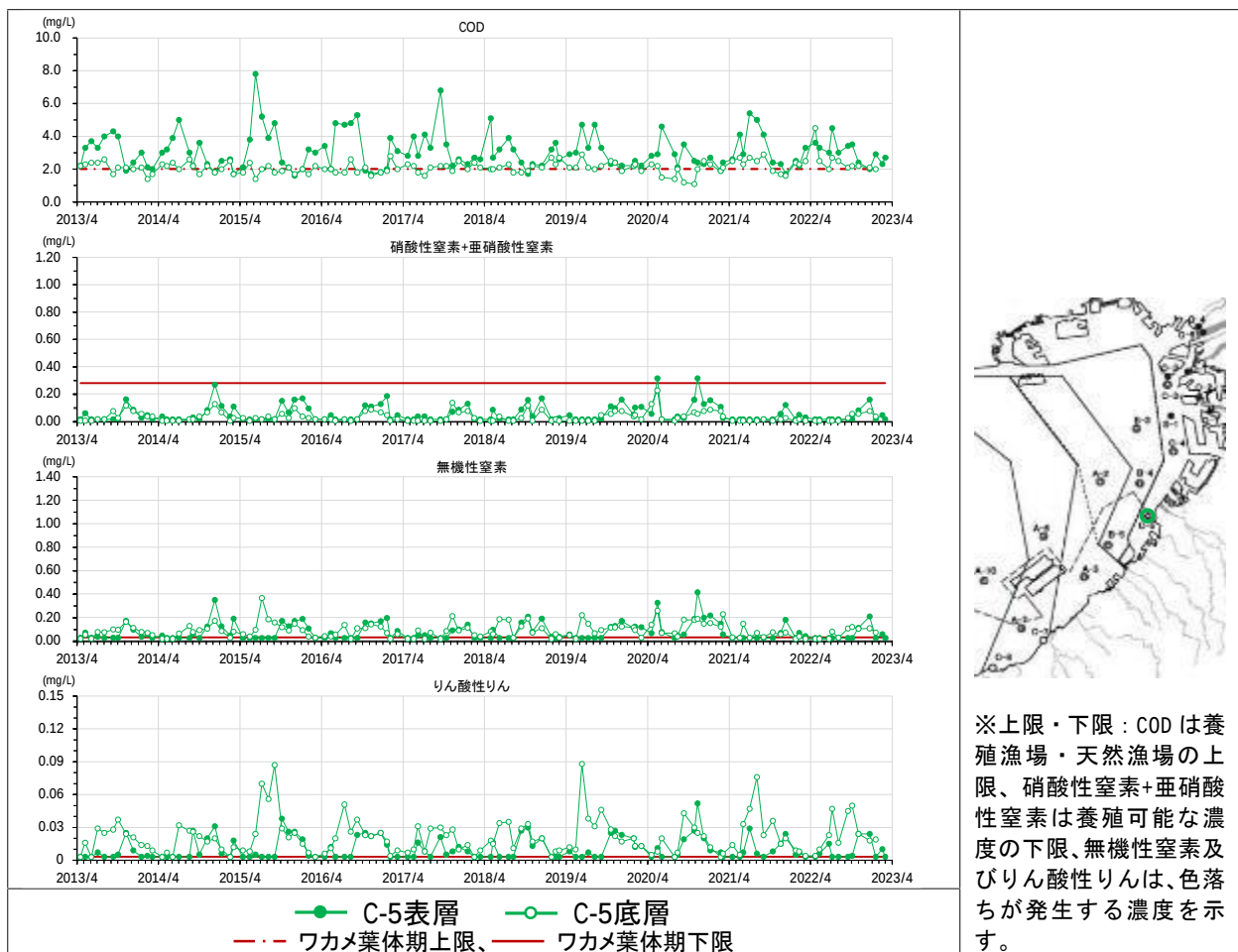
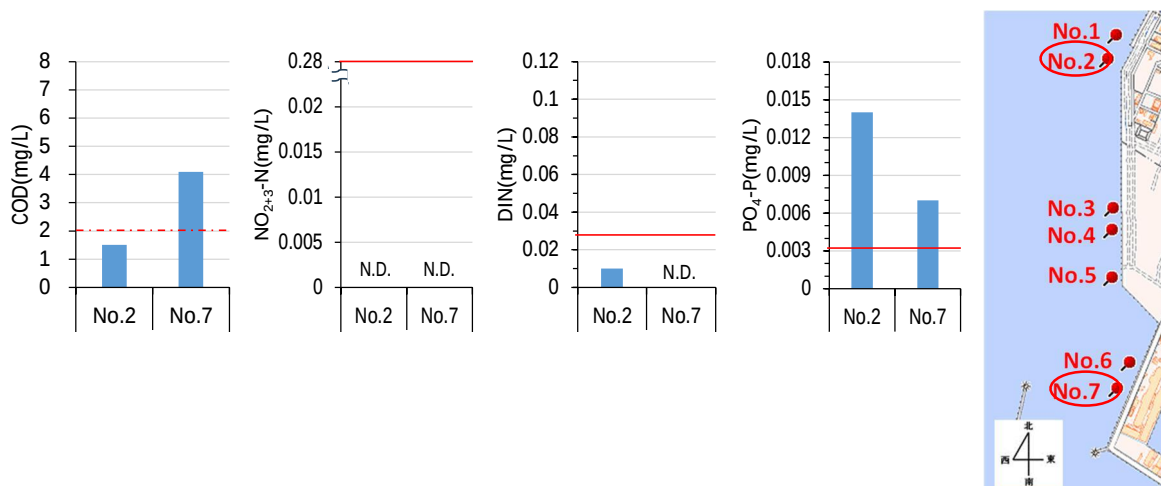
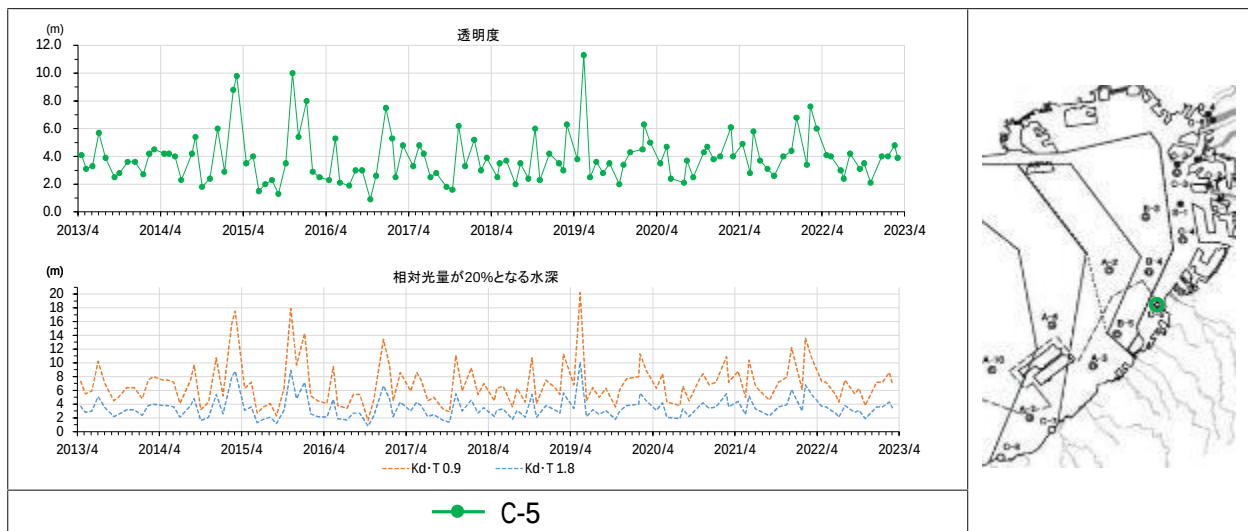


図 5.4.4-10 新浜地区近傍の大阪府公共用水域水質調査の C-5 における COD と栄養塩類の推移とワカメの生存・生育条件



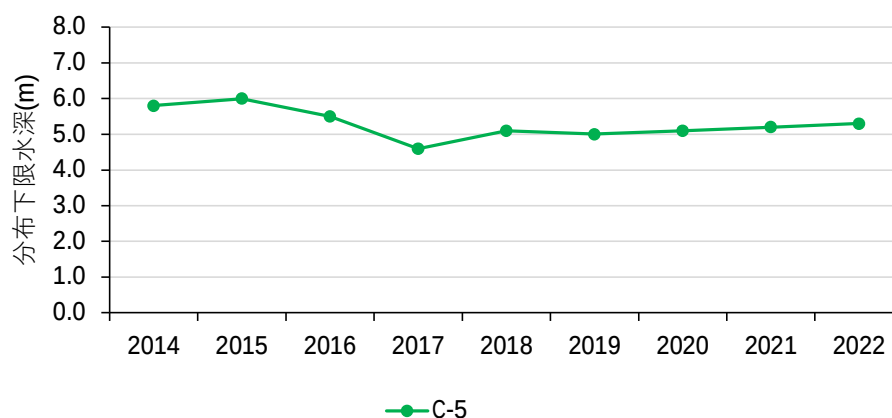
※赤色線：CODは養殖漁場・天然漁場の上限、硝酸性窒素+亜硝酸性窒素は養殖可能条件の下限、無機性窒素及びりん酸性りんは、色落ちが発生する濃度を示す。

図 5.4.4-11 新浜地区における本調査の採水・分析結果(左から COD, 硝酸性窒素+亜硝酸性窒素, 無機性窒素, りん酸性りん)



相対光量 20%の水深の推定は Holmes(1970) 菱田ら(1978)による

図 5.4.4-12 新浜地区近傍の大阪府公共用水域水質調査の C-5 における透明度と透明度から推定した相対光量 20%の水深



※環境省(2010)に示された方法により推定

図 5.4.4-13 新浜地区近傍の大阪府公共用水域水質調査の C-5 における透明度の年平均値から推定したカジメ孢子体期の分布下限水深(m)

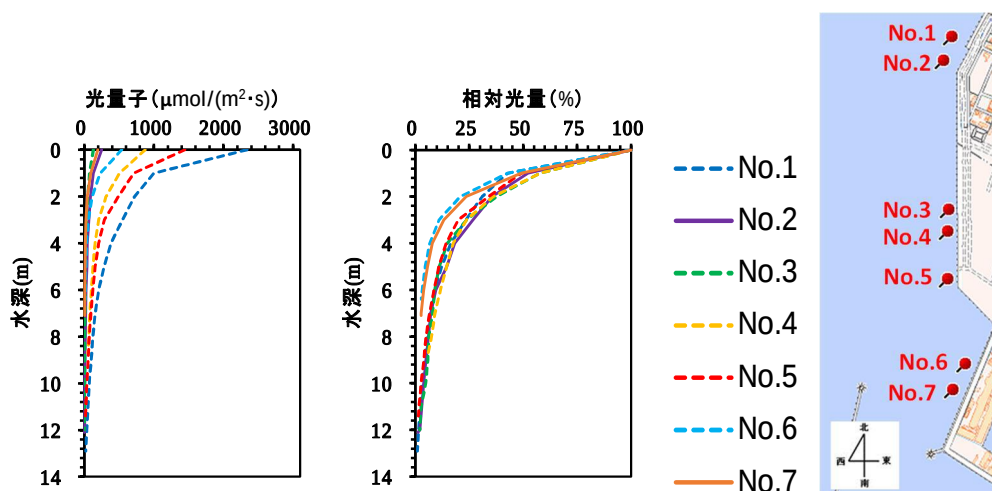


図 5.4.4-14 新浜地区における本調査の水中光量子・相対光量測定結果

(3)-2 大阪湾水質定点自動観測データ配信システム（近畿地方整備局）のデータ

新浜地区の近傍には大阪湾水質定点自動観測データ配信システムの地点がないため、南側に位置する阪南沖窪地の観測点(図 5.4.4-16)における水温・塩分等の連続観測結果を収集・整理し、ワカメ等の生存条件との比較を行った。

データ取得期間は 2010 年 1 月～2024 年 5 月とし、取得したデータより 1 日の平均値を算出し、下茂ら(2000)及び藤田ほか(2006)等)に示されているワカメの生活史段階別の生存条件範囲外となる季節毎の月平均日数を集計した。



図 5.4.4-15 本調査の調査地点(No.1～7)と大阪湾水質定点自動観測データ配信システムの観測点(阪南沖窪地)

①ワカメ

ワカメの生活史段階別の生存上限・下限を表 5.4.4-2 に示す。これらの値と大阪湾水質定点自動観測データの水深 0.5m、水深 2m、水深 4m、水深 5m、水深 6m、水深 8m とを比較した。その結果を表 5.4.4-3(1)～(2)に示す。また、参考として水深 0.5m と水深 5m の水温・塩分の推移を図 5.4.4-16 に示す。

表 5.4.4-2 ワカメの水温・塩分の基準

項目	生活段階	時期	生存下限値	生存上限値
水温	孢子体成熟期	春季頃	—	30℃
	遊走子期	春～夏季頃	—	30℃
	配偶体期	夏季頃	—	31℃
	芽胞体期	秋季頃	—	—
	孢子体幼体期	秋～春季頃	2℃	26℃
塩分	孢子体期	秋～春季頃	15	—
	遊走子着生期	春季頃	9	—
	配偶体期	夏季頃	15	—

馬場(2021)、藤田ら(2006)による。

※ワカメについては、光量の生存下限値に関する情報なし。

水温は、ワカメの孢子体幼体期・成熟期、遊走子期、配偶体期の生存条件と比較した結果、いずれの生活史の時期も不適となる日数はほとんどなく、不適日数が遊走子期の該当する夏季に 1 日程度にとどまった(表 5.4.4-3(1))。

塩分は、ワカメの孢子体期、遊走子着生期、配偶体期の生存条件と比較した結果、孢子体期や遊走子着生期に該当する季節には不適となる日はなかった(表 5.4.4-3(2))。

このようにワカメの生活史の段階に応じた基準から整理した結果、水温及び塩分ともに問題がなく、藻場創出は可能であると考えられる。

表 5.4.4-3(1) 阪南沖窪地における測定記録に対するワカメの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（水温）

期間	水深	孢子体 幼体期		孢子体 成熟期	遊走子期	配偶体期
		秋～冬季頃		春季頃	春～夏季頃	夏季頃
		2℃未満	26℃以上	30℃以上	30℃以上	31℃以上
期間 春季 (4～6月)	0.5m	0	0.3	0	0	0
	2m	0	0.3	0	0	0
	4m	0	0	0	0	0
	5m	0	0	0	0	0
	6m	0	0	0	0	0
	8m	0	0	0	0	0
夏季 (7～9月)	0.5m	0	21.3	1.7	1.7	0.3
	2m	0	19.0	1.0	1.0	0
	4m	0	12.7	0	0	0
	5m	0	10.3	0	0	0
	6m	0	9.0	0	0	0
	8m	0	6.3	0	0	0
秋季 (10～12月)	0.5m	0	0.3	0	0	0
	2m	0	0.3	0	0	0
	4m	0	0.3	0	0	0
	5m	0	0.3	0	0	0
	6m	0	0.3	0	0	0
	8m	0	0.3	0	0	0
冬季 (1～3月)	0.5m	0	0	0	0	0
	2m	0	0	0	0	0
	4m	0	0	0	0	0
	5m	0	0	0	0	0
	6m	0	0	0	0	0
	8m	0	0	0	0	0

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。

表 5.4.4-3(2) 阪南沖窪地における測定記録に対するワカメの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（塩分）

		胞子体期	遊走子着生期	配偶体期
		秋～春季頃	春季頃	夏季頃
期間	水深	15 未満	9 未満	15 未満
春季 (4～6 月)	0.5m	0	0	0
	2m	0	0	0
	4m	0	0	0
	5m	0	0	0
	6m	0	0	0
	8m	0	0	0
夏季 (7～9 月)	0.5m	0	0	0
	2m	0	0	0
	4m	0	0	0
	5m	0	0	0
	6m	0	0	0
	8m	0	0	0
秋季 (10～12 月)	0.5m	0	0	0
	2m	0	0	0
	4m	0	0	0
	5m	0	0	0
	6m	0	0	0
	8m	0	0	0
冬季 (1～3 月)	0.5m	0	0	0
	2m	0	0	0
	4m	0	0	0
	5m	0	0	0
	6m	0	0	0
	8m	0	0	0

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。

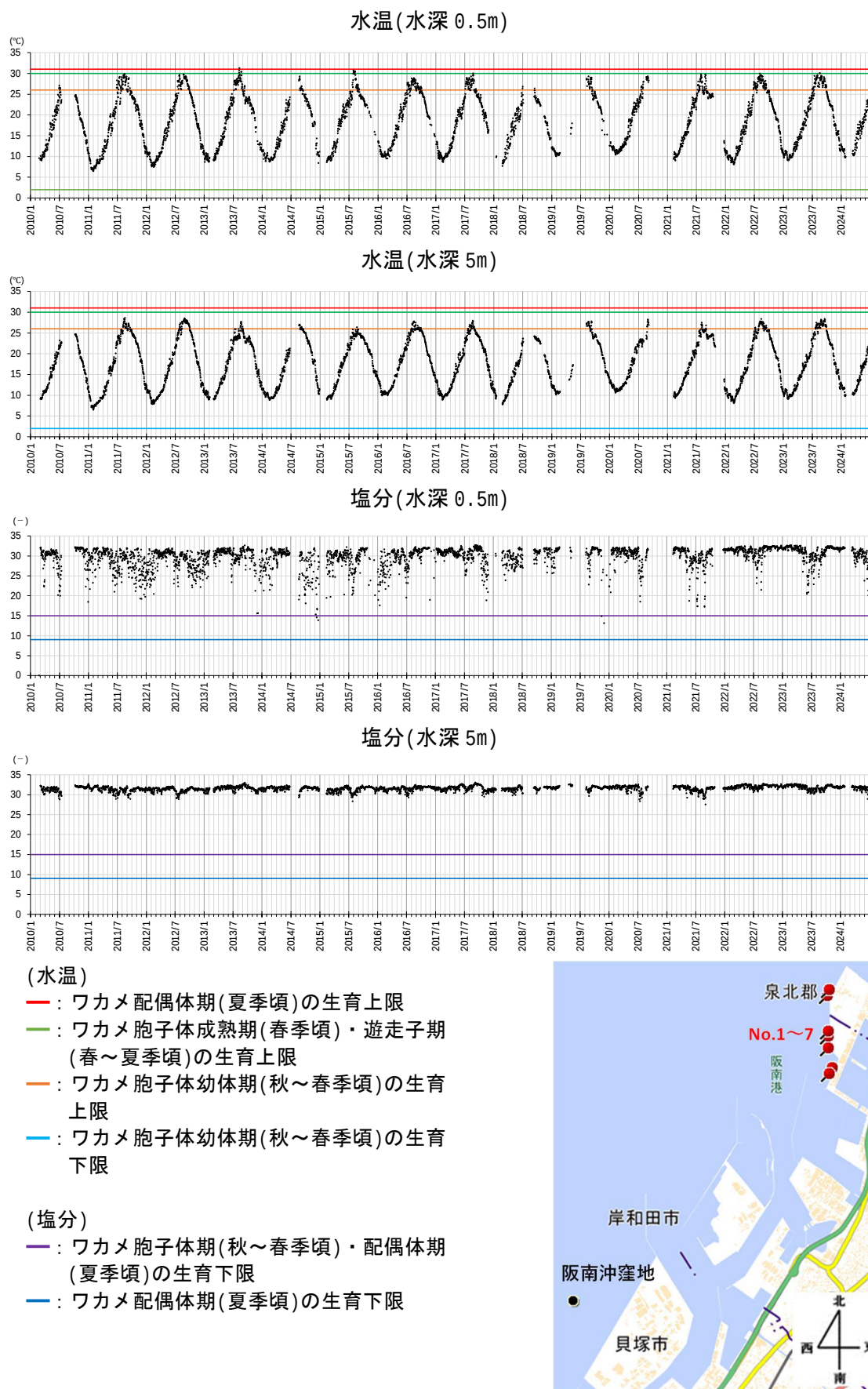


図 5.4.4-16 阪南沖窪地における水温・塩分の連続観測結果(水深 0.5m・水深 5m)とワカメの生存条件

②シダモク、タマハハキモク、アカモク

シダモク、タマハハキモク及びアカモクの生活史段階別の生存上限・下限を表 5.4.4-4 に示す。これらの値と大阪湾水質定点自動観測データの水深 0.5m、水深 2m、水深 4m、水深 5m、水深 6m、水深 8m とを比較した。その結果を表 5.4.4-5(1)～(3)に示す。また、参考として図 5.4.4-17(1)～(2)に水深 0.5m と水深 5m の水温、塩分の推移を示す。

表 5.4.4-4 シダモク、タマハハキモク、アカモクの水温・塩分・光量の基準

項目	種	生活史段階	時期	生存下限値	生存上限値
水温	シダモク	生活史全体	通年	—	30℃
	タマハハキモク	発芽期	春～夏季頃	—	30℃
	アカモク	生活史全体	通年	—	30℃
		発芽期	春～夏季頃	—	30℃
塩分	シダモク	幼胚期	春～夏季頃	16	—
	タマハハキモク	発芽期	春～夏季頃	16	—
	アカモク	幼胚期	春～夏季頃	16	—
光量	シダモク	幼体期	春～夏季頃	25 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$	—
	タマハハキモク	幼体期	春～夏季頃	50 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$	—
	アカモク	幼体期	春～夏季頃	10 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$	—
		発芽期	春～夏季頃	25 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$	—

吉田(2005)、馬場(2007)による。

※光量は 6 時～18 時の間のデータを用いた。

水温は、3 種とも概ね不適となる日数がなく、不適日数が夏季に水深 0.5m～1.0m で 1～2 日程度となった。

塩分は、不適となる日数がなかった。

光量は、深い水深程不適日数が多くなり、不適日数がタマハハキモクの幼体期が水深 5m で 9～11 日程度となり、シダモク、アカモクの幼体期が水深 8m で 13～16 日程度となり、アカモクの発芽期では水深 8m でも 5～7 日程度であった。

このようにシダモク、タマハハキモク、アカモクの生活史の段階に応じた基準から整理した結果、水温が海面付近で若干不適となる日数があつた。一方、深い水深では光量不足になる可能性があり、シダモク、タマハハキモク、アカモクの幼体期で必要とする光量が水深 5～8m で不適日数が 10 日間以上となっていた。このようにシダモク、タマハハキモク、アカモクにとって海面付近は一時的に生息に不適な環境になり、底層付近も光量が不足することが想定されるが、表層付近と底層付近を除いた水深帯で藻場創出は可能であると考えられる。

表 5.4.4-5(1) 阪南沖窪地における測定記録に対するシダモク、アカモク、タマハハキモクの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（水温）

海藻種 生活段階 時期		シダモク、アカモク 生活史全体	タマハハキモク、アカモク 発芽期
期間		通年	春～夏季頃
水深		30℃以上	30℃以上
春季 (4～6月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
夏季 (7～9月)	0.5m	1.7	1.7
	2m	1.0	1.0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
秋季 (10～12月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
冬季 (1～3月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。

表 5.4.4-5(2) 阪南沖窪地における測定記録に対するシダモク、アカモク、タマハハキモクの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（塩分）

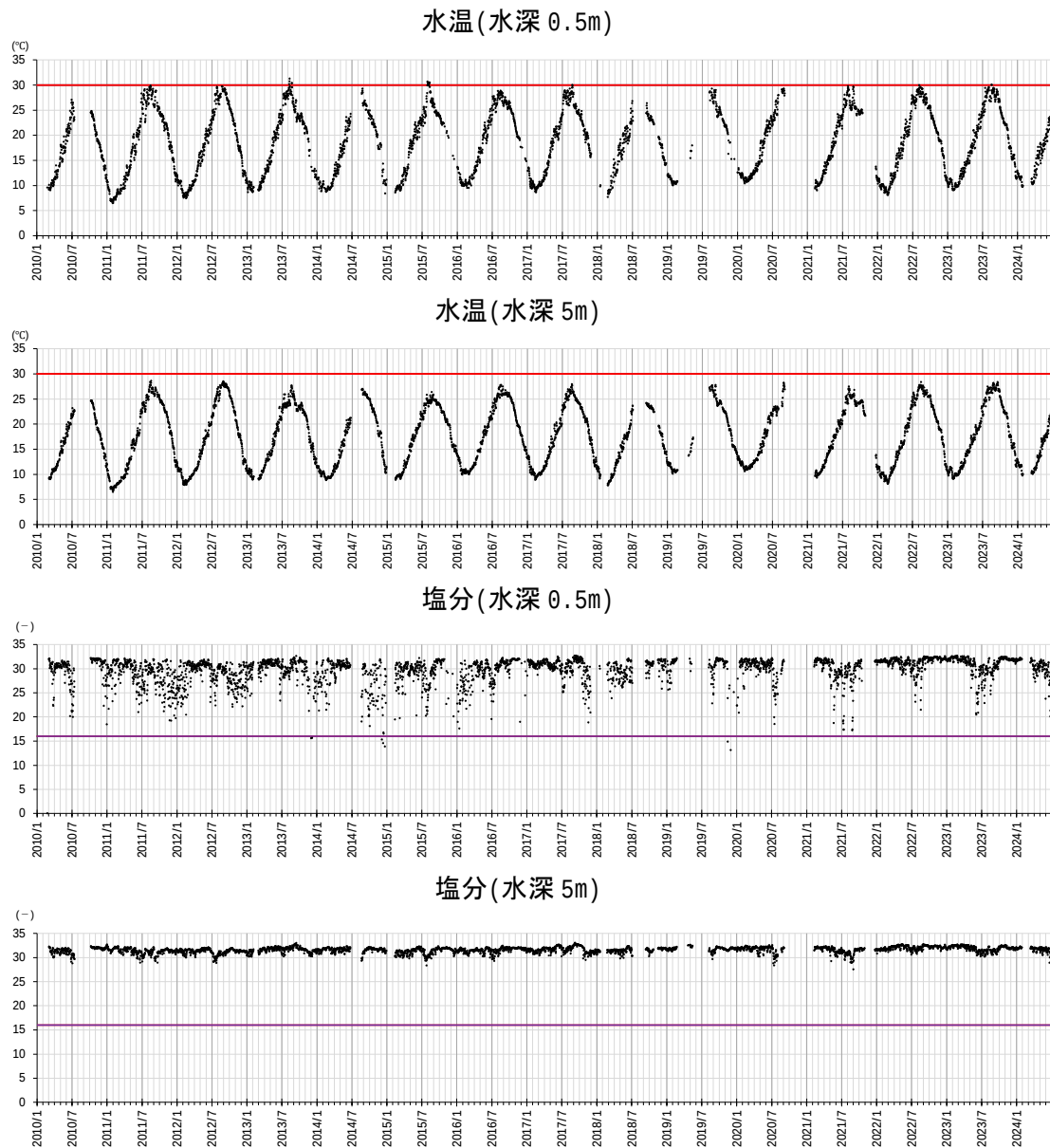
		シダモク、アカモク 幼胚期	タマハハキモク 発芽期
期間		春～夏季頃	春～夏季頃
水深		16未満	16未満
春季 (4～6月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
夏季 (7～9月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
秋季 (10～12月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0
冬季 (1～3月)	0.5m	0	0
	2m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
	6m	0	0
	8m	0	0

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。

表 5.4.4-5(3) 阪南沖窪地における測定記録に対するシダモク、アカモク、タマハハキモクの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（光量）

		シダモク、アカモク	アカモク	タマハハキモク
		幼体期	発芽期	幼体期
		春～夏季頃	春～夏季頃	春～夏季頃
期間	水深	25 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$ 未満	10 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$ 未満	50 $\mu\text{E}/\text{m}^2/\text{s}$ 未満
春季 (4～6月)	0.5m	0	0	0.3
	2m	0.7	0	1.0
	4m	1.7	0.7	5.7
	5m	3.3	1.0	9.0
	6m	6.3	1.7	13.7
	8m	13.3	5.0	22.0
夏季 (7～9月)	0.5m	0	0	0.3
	2m	1	0	1.0
	4m	2	1.0	5.7
	5m	4.3	1.0	10.7
	6m	7.7	2.0	15.3
	8m	15.7	6.7	22.3
秋季 (10～12月)	0.5m	0	0	1
	2m	1	0	2.3
	4m	3.3	1.0	9.7
	5m	7.0	2.0	17.3
	6m	12.7	3.3	24.0
	8m	23.3	11.0	29.3
冬季 (1～3月)	0.5m	0	0	0.7
	2m	0.7	0	2.3
	4m	3.3	1.0	8.0
	5m	6.7	1.7	13.7
	6m	10.3	3.0	18.3
	8m	18.0	9.0	25.3

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。
光量は6～18時の時間のデータを用いて日平均とした。



(水温)
 —：シダモク、アカモクの生活史全体、タマハハキモクの発芽期の生存上限

(塩分)
 —：シダモク、アカモクの幼胚期、タマハハキモクの発芽期の生存下限



図 5.4.4-17(1) 阪南沖窪地における水温・塩分の日平均の推移とシダモク、アカモク、タマハハキモクの生存条件

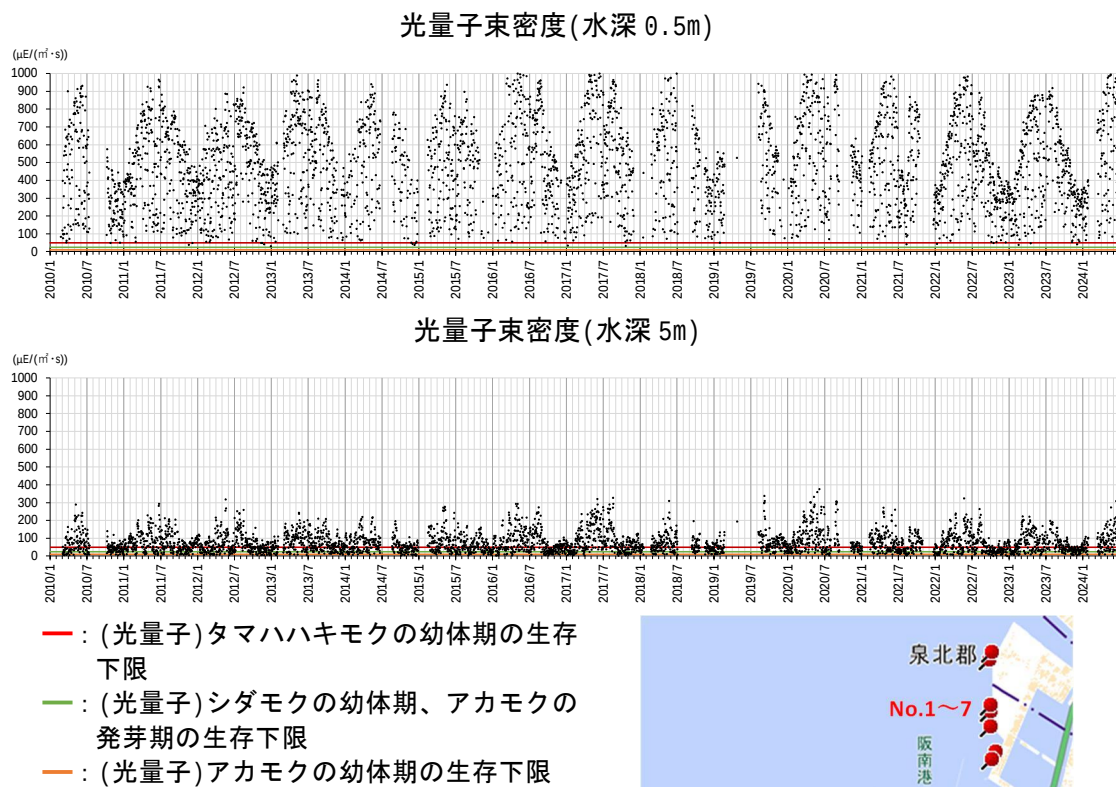


図 5.4.4-17(2) 阪南沖窪地における光量子束密度の日平均の推移とシダモク、アカモク、タマハハキモクの生存条件

②カジメ

カジメの生活史段階別の生存上限・下限をエラー！参照元が見つかりません。に示す。これらの値と大阪湾水質定点自動観測データの水深 0.5m、水深 1m～水深 5m とを比較した。その結果をエラー！参照元が見つかりません。に示す。また、参考として図 5.4.4-18 に水深 0.5m と水深 5m の水温、塩分の推移を示す。

水温は、夏季に不適となる日数がみられ、水深が浅いほど日数が多く、水深 1m 以浅では不適日数が 10 日程度となった。

塩分は、四季を通して水深が浅いほど不適日数が多く、特に夏季では水深 1m 以浅で不適日数が 2～3 日程度となった。

このようにカジメの生活史の段階に応じた基準から整理した結果、海面から 1m 程度は一時的に生息に不適な環境になることが想定される。また、透明度より求めた分布下限水深は、概ね水深 5～6m の範囲にあることから、表層付近と底層付近を除いた水深帯で藻場創出が出来る可能性がある。

表 5.4.4-6 カジメの水温・塩分の基準

項目	種	生活史段階	時期	生存下限値	生存上限値
水温	カジメ	孢子体期	通年	—	28℃
塩分	カジメ	孢子体期	通年	25	—

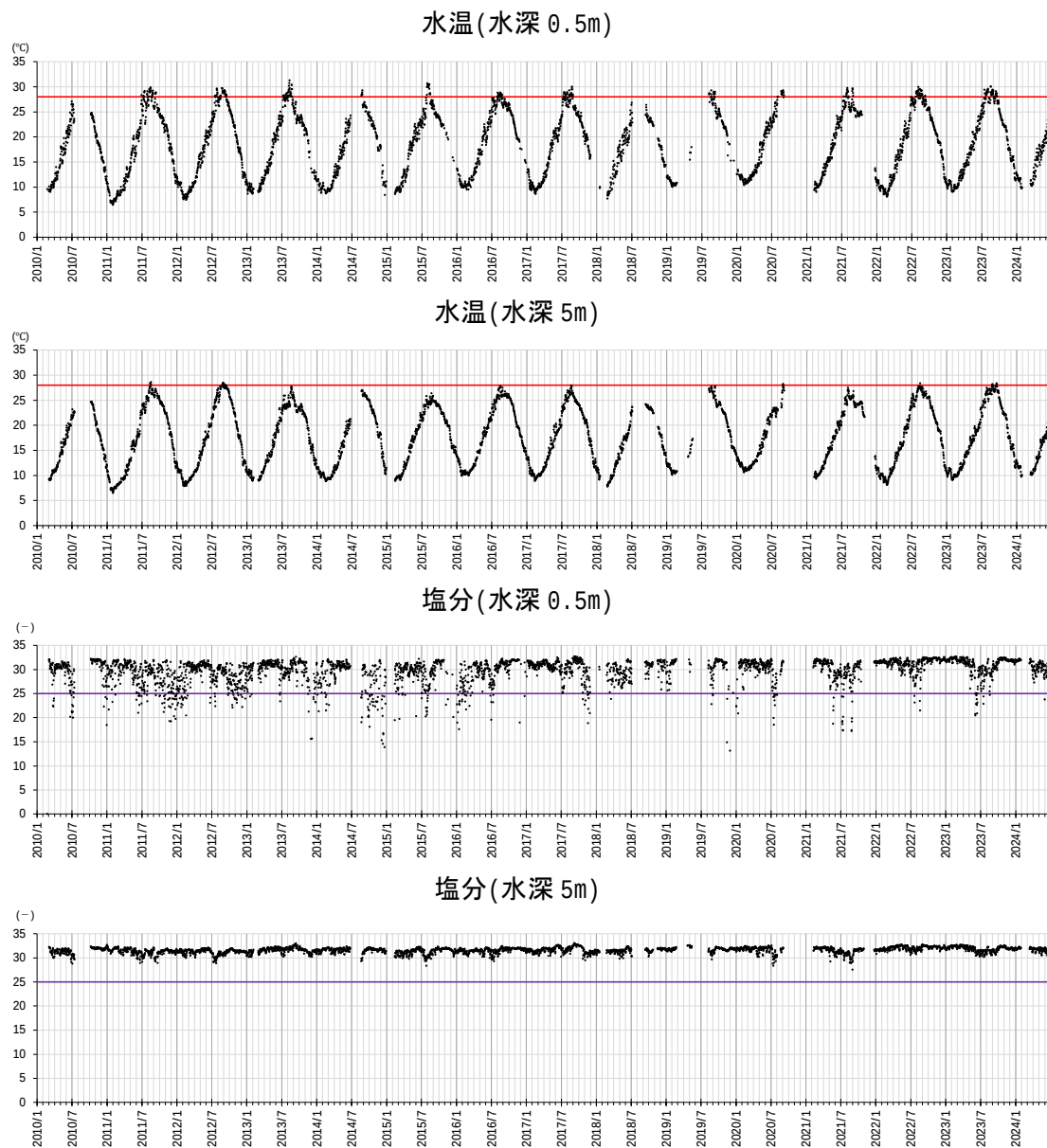
鈴木(2014)、鈴木ら(2001)による。

※カジメについては、光量の生存下限値に関する情報なし。

表 5.4.4-7 阪南沖窪地における測定記録に対するカジメの生存条件に対する季節毎の月平均不適日数（水温・塩分）

期間	水深	カジメ(水温)	カジメ(塩分)
		生活史全体 通年 28℃以上	生活史全体 通年 25 未満
春季 (4～6 月)	0.5m	0.3	1.7
	1m	0.3	1.0
	2m	0	0.3
	3m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
夏季 (7～9 月)	0.5m	10.3	3.0
	1m	9.3	2.3
	2m	7.3	1.0
	3m	4.3	0.3
	4m	2.3	0
	5m	1.3	0
秋季 (10～12 月)	0.5m	0	2.7
	1m	0	0.7
	2m	0	0
	3m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0
冬季 (1～3 月)	0.5m	0	1.7
	1m	0	0.3
	2m	0	0
	3m	0	0
	4m	0	0
	5m	0	0

※色付きの範囲が、各生活史の段階の該当する季節を示す。



(水温)

—: カジメの生活史全体の生存上限

(塩分)

—: カジメの生活史全体の生存下限



図 5.4.4-18 阪南沖窪地における水温・塩分の日平均の推移とカジメの生存条件

(3)-3 水環境を基にしたワカメ等の環境ポテンシャル水深帯

ワカメ等の生存・生育条件と水環境から環境ポテンシャル水深帯(※)を設定した(表 5.4.4-8)。

環境ポテンシャル水深帯の設定には、大阪湾水質定点自動観測データ配信システム(近畿地方整備局)の結果を海藻種毎の生活史の段階に応じた基準と比較して用いることを基本としたが、ワカメ及びカジメについては光量の生存・生育条件の既往知見がないため、公共用水域水質調査結果(大阪府)や浅海定線調査結果(大阪府)の透明度から算出し、ワカメの生育に必要な相対照度による下限水深及びカジメの分布下限水深を設定した。

海藻種毎の環境ポテンシャル水深帯として、ワカメは、水深 0～8m の範囲となり、法尻水深が 6～13m であることから場所によってはさらにポテンシャル水深帯が狭まる。シダモク等のホンダワラ類は 1～4m もしくは 6m であり、カジメは 2～5m とワカメに比べて範囲が狭くなった。

(※) 環境ポテンシャル水深帯：海藻種の生存・生育条件を基に水環境の状況から分布可能な水深帯を示したもの。

表 5.4.4-8 新浜地区におけるワカメ等の環境ポテンシャル水深帯

種類	環境ポテンシャル水深帯		
	浅所側	深所側	
項目	水温・塩分	光量	法尻水深
ワカメ	0m	8m	6～13m
シダモク	1m	6m	
タマハハキモク	1m	4m	
アカモク	1m	6m	
カジメ	2m	5m	

(4)創出候補種

創出候補種としては、新浜地区で出現した「ワカメ」「シダモク(アカモク)」「タマハハキモク」が考えられる。3 種のうち、ワカメは最も分布範囲が広く被度の高い範囲も確認されているが、いずれの種も新浜地区において、分布しない範囲や被度が低い範囲があるためである。なお、「アカモク」については当海域においては「シダモク」の代替種として創出候補種に含める。

また、これらの 3 種以外の候補に関しては、近傍海域の関西国際空港島や泉佐野以南で分布が広く確認されているカジメやヨレモクモドキが想定される。カジメについては、水温、塩分、透明度の条件では表層や底層を除き生育できる可能性がある。但し、新浜地区は大津川河口に位置し、No.1 や No.2 でワカメが出現していないことや、タマハハキモク、シダモクの分布範囲・被度も小さいことから、公共用水域調査や大阪湾水質定点自動観測データ配信システムでは出水の影響が捉えられていない可能性がある。このため、カジメやヨレモクモドキについては当海域での創出については、不明な点が多く、ワカメ等の移植に合わせて試験的に行うことで生育の可能性を把握することも今後の知見の蓄積において重要と考えられる。

小型海藻については、各種の生活史や生存・生育条件が不明瞭であり特定種を対象とした創出手法等については言及しないが、調査時に観察されたカバノリ、シキンノリ、ススカケベニ、ソゾ類、フクロノリ、ムカデノリ、ヤハズグサ等の小型海藻が藻場創出の整備に伴い増加すると期待される。

以上のことから、当海域における創出候補種は、「ワカメ」、「シダモク(アカモク)」、「タマハハキモク」とし、特にワカメについては、既存出現種として広範囲かつ高い被度で確認されているため、優先的な創出候補種となりうる可能性が高い。但し、候補種の選定には、海藻種の多様性も考慮する必要がある。また、移植による藻場創出を行う場合には、母藻の選定において遺伝的多様性に十分な配慮が必要である。

(5)新浜地区における藻場造成手法（案）について

①創出候補種の分布水深帯と被度及び環境ポテンシャル水深

創出候補種の新浜地区における出現状況と環境ポテンシャル水深帯を表 5.4.4-9 に示す。

ワカメは、各地点の自生水深帯は 0～1m 以深から 6～8m 以浅であった。このうち各地点の最も被度が高い水深帯は、概ね各地点の自生水深帯より 1～2m 程度浅い水深に形成されていた。一方、環境ポテンシャル水深帯は概ね 0～8m となっており、概ね合致していた。

シダモク(アカモク)は、被度が極点生もしくは点生で、自生水深帯が 3～6m に対し、環境ポテンシャル水深帯が 0～6m となっている。

タマハハキモクは、被度が極点生で自生水深帯が 1～2m に対し、環境ポテンシャル水深帯も 1～2m となっている。

小型海藻は、多種の海藻の繁茂が確認され、自生水深は概ね 0～7m の範囲となっており、環境ポテンシャル水深も 0～8m となっている。

表 5.4.4-9 新浜地区における創出候補種の分布水深帯と被度及び環境ポテンシャル水深帯

創出候補種	創出候補箇所						
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7
ワカメ(※1)							
被度	極点生	—	濃生	濃生	濃生	濃生	濃生
自生水深帯	1m		0～5m (0～6m)	0～4m (0～6m)	1～6m (1～8m)	1～6m (1～7m)	0～6m (0～6m)
環境ポテンシャル水深帯	0～8m	0～8m	0～8m	0～8m	0～8m	0～7m	0～6m
シダモク(アカモク(※2))							
被度	極点生	極点生	—	—	—	—	点生
自生水深帯	4m	6m					3m
環境ポテンシャル水深帯	1～6m	1～6m					1～6m
タマハハキモク							
被度	極点生	点生	—	極点生	—	—	—
自生水深帯	4m	2～5m (2～6m)		5m			
環境ポテンシャル水深帯	1～4m	1～4m					
小型海藻(※3)							
自生水深帯	0～8	0～6m	0～9m	0～9m	0～10m	0～6m	0～6m
環境ポテンシャル水深帯	0～13m	0～10m	0～10m	0～9m	0～10m	0～7m	0～6m
法尻水深	13m	10m	10m	9m	10m	7m	6m

・環境ポテンシャル水深帯は、本調査及び大阪府公共用水域水質調査他の環境条件結果から、各種の分布可能な水深帯を想定した。

※1 ワカメ・タマハハキモクは、最も被度が高い水深帯と、()で最も高い被度以下の被度を含めた出現範囲を示す。

※2 アカモクは、当海域では出現していないが、シダモクの代替種として記載。

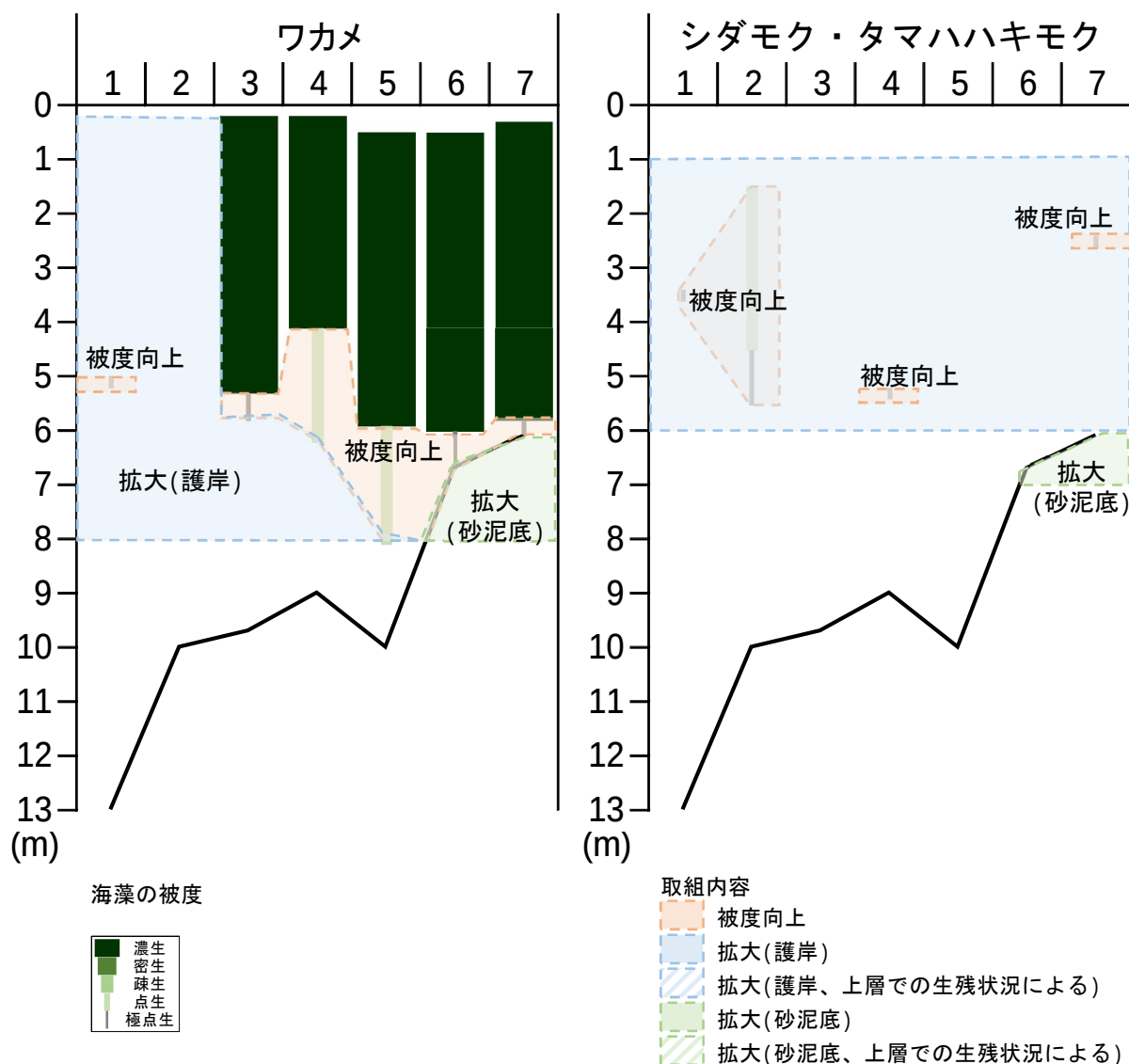
※3 小型海藻は、基盤整備等の過程で副次的に創出が期待される。

②創出候補箇所

創出候補箇所は、創出候補種の被度が低い箇所及び分布が確認されていない箇所を中心とする。

ワカメは、被度の高い場所を核藻場として機能させ、周囲の被度の低い箇所で取り組むこととする。また、シダモク、タマハハキモクは、分布がみられる箇所で取り組み、核藻場として機能させることとする。そうすることで、再生産する際に遊走子等が拡散することで、現在の藻場を維持するとともに能動的に周辺に被度の高い藻場が形成されることが考えられる。

創出する水深は、環境ポテンシャル水深帯を基本とし、上限水深は、ワカメ、シダモク(アカモク)、タマハハキモクともに水深 0～1m 程度とするが、大津川からの出水の影響が不明であるため、出水時の表層の低塩分化には十分注意する必要がある。下限水深は、ワカメの被度が低い水深帯も今まで以上に繁茂できる可能性があるため、環境ポテンシャル水深下限の 8m とする。一方、シダモク(アカモク)、タマハハキモクは水深 4～6m 程度までを基本とするが、光量条件については、阪南沖窪地の観測データを基に検討しているため、また、大津川からの出水時の濁りによる低光量の影響が不明であるため、深い水深帯については低光量となることに注意が必要である。



※アカモクの母藻・幼体等が入手できる場合には、シダモクの代替種として扱う。

図 5.4.4-19 新浜地区におけるワカメとシダモク(代替種アカモク)・タマハハキモクの取組内容

③創出手法について

ワカメは、北側で被度が濃生な範囲がみられることから、母藻(遊走子)の供給が可能と考えられる。そのため、主に南側での被度の向上や繁茂のみられない箇所での分布拡大が考えられる。

シダモク(アカモク)・タマハハキモクは、被度も低く、分布範囲が限られることから、分布範囲内での被度の向上に加え、母藻(幼胚)や幼体等の移植による周囲への分布拡大等が考えられる。

③-1 被度向上

被度向上には、母藻等や幼体・種苗等移植による手法があげられる。

シダモク(アカモク)・タマハハキモクについては、現在、分布範囲が限られることから、分布水深帯を中心に行い、徐々に深所に拡大していくことで、適切な分布下限を把握することができる。

a. オープンスポアバック等の設置及び既存基盤の表面付着物除去

既存基盤(消波ブロックや被覆石等)へ着生させる遊走子等の量を増加させるため、創出候補種の成熟期(3~5月)の母藻を「オープンスポアバック」や「網袋」または「延縄方式」によって海域に設置する手法がある。

創出候補種の母藻の入手は近傍海域で採取することが前提と考えられる。ワカメについては護岸の北側の被度の高い箇所の株を母藻として用いることが適当である。

既存基盤を活用する場合、「オープンスポアバック等の設置」にあたっては、既存基盤の表面付着物除去を行うことで、遊走子等の着生を高める可能性がある。

特に南部側のうち砂泥等の堆積がみられる箇所においては、必須であると考えられる。

b. 基質の取り付け

「増殖用ブロック」や「増殖用基質材」といった基質を既存基盤に取り付け、より効果的に海藻着生基盤を整備する手法がある。(※増殖用基質材の例は一般社団法人水産土木建設技術センター発行の水産土木事業のための積算技術情報資料(<https://www.fiddec.or.jp/other>)を参照。)

成熟期(3~5月)に設置することで、既存海藻藻場からの遊走子等の自然着生が期待できる。

母藻が繁茂する場所では、母藻からの遊走子等の供給が期待できることから、「石材・ブロック等」を母藻の近傍に置き、幼体等が着生後、「石材・ブロック等の移設」を行うことも有効である。

また、基質の設置時に種糸(12~1月頃)や種苗を取り付けることや、「オープンスポアバック等の設置」と組み合わせることで、より効果的な藻場創出を行うことができる可能性がある。

更に、毎年、遊走子等の着生前に「付着物の清掃等」のメンテナンスを行うことでより高い再生産が期待できると考えられる。

なお、幼体・種苗等の入手が難しい場合には、成熟期に母藻を刈り取り、「種苗を生産」する方法もある。タマハハキモクといった多年生の海藻については、基部や茎の一部を残すことにより、再生長が期待できる。

③-2 拡大(護岸)

③-2-1 表層付近

a. 着生面の洗浄(付着物等の除去)

創出候補種の分布箇所周辺では、着生面の競合によりが繁茂できていない可能性がある。このことから、遊走子等の着生期前に基盤表面の「付着生物の掃除等」を行うことで、既存海藻藻場からの遊走子等の自然着生が期待できる。

ワカメ、シダモク(アカモク)・タマハハキモクについては、成熟期が春頃のため、着生面の洗浄は成熟期前に行う必要があるとともに、成長中のこれらの海藻を除去しないように注意して作業を行う必要がある。

なお、シダモク(アカモク)・タマハハキモクは、現在の分布範囲が狭く被度も低いことから、幼胚の供給量も少ないことが見込まれるため「オープンスポアバック等の設置」や「種苗等を取り付けた増殖用基質材等の設置」を併用する必要がある。

③-2-2 底層付近

a. 砂泥等の除去

底層付近については、砂泥等の堆積の影響を受け、基盤に遊走子等が着底出来ていない可能性があるため、砂泥等の除去を行う。

特に、当海域の南側の海域(No.5~7)では、既存基盤上に砂の堆積がみられる。砂の堆積は、荒天等による海底の攪乱や近傍河川等の影響で解消・悪化・常態化するものと考えられる。

砂の堆積は、遊走子着生に影響を及ぼす可能性があることから、「オープンスポアバック等の設置」、「基質の設置及びメンテナンス」の作業時期を決める際に、注意が必要である。

また、「基質の設置」の際にも基質の取り付け方、基質の形状等の検討の際にも砂の影響について考慮すべきと考えられる。

③-3 拡大(砂泥底)

護岸前面は砂泥底となっており、藻礁といった新たな基盤を設置することで岩礁性藻場の創出ができる。

新浜地区では南側から北側に向けて法尻の水深が深いことから、法尻の水深が浅く、ワカメ、シダモク、タマハハキモクの創出水深の下限に近い南側のNo.6とNo.7を想定している。

藻礁の設置は、施工コストが高いことや港湾エリアである湾奥部においては、関係機関調整等の課題があるが、藻場が存在していないエリアに大規模な藻場を形成することができる。

また、オープンスポアバック等の組み合わせにより、効果的な藻場創出が可能な他、着生基盤の高さをコントロールすることが可能であるため、設置時に水中光量の確保や砂の移動・堆積影響の対策を取ることが可能と考えられる。

④その他留意事項について

a. 食害の影響

藻場創出後、食害の影響を受けることが分かった場合には、対象種の特定とその対策が必要となる。新浜地区で主な藻食性動物としては、魚類(クロダイ、アイゴ)が考えらえる。

両魚種は低水温になると摂食圧が低下するため、創出候補種の種糸設置など冬季に海藻を移植する場合は低水温期(10～15℃以下)に行うことが望ましい。

摂食圧が高い時期においては、食害対策用の基質の採用等や、創出した藻場を核藻場として囲い網等による保護をする対策が有用であると考えられる。

b. 関係機関調整

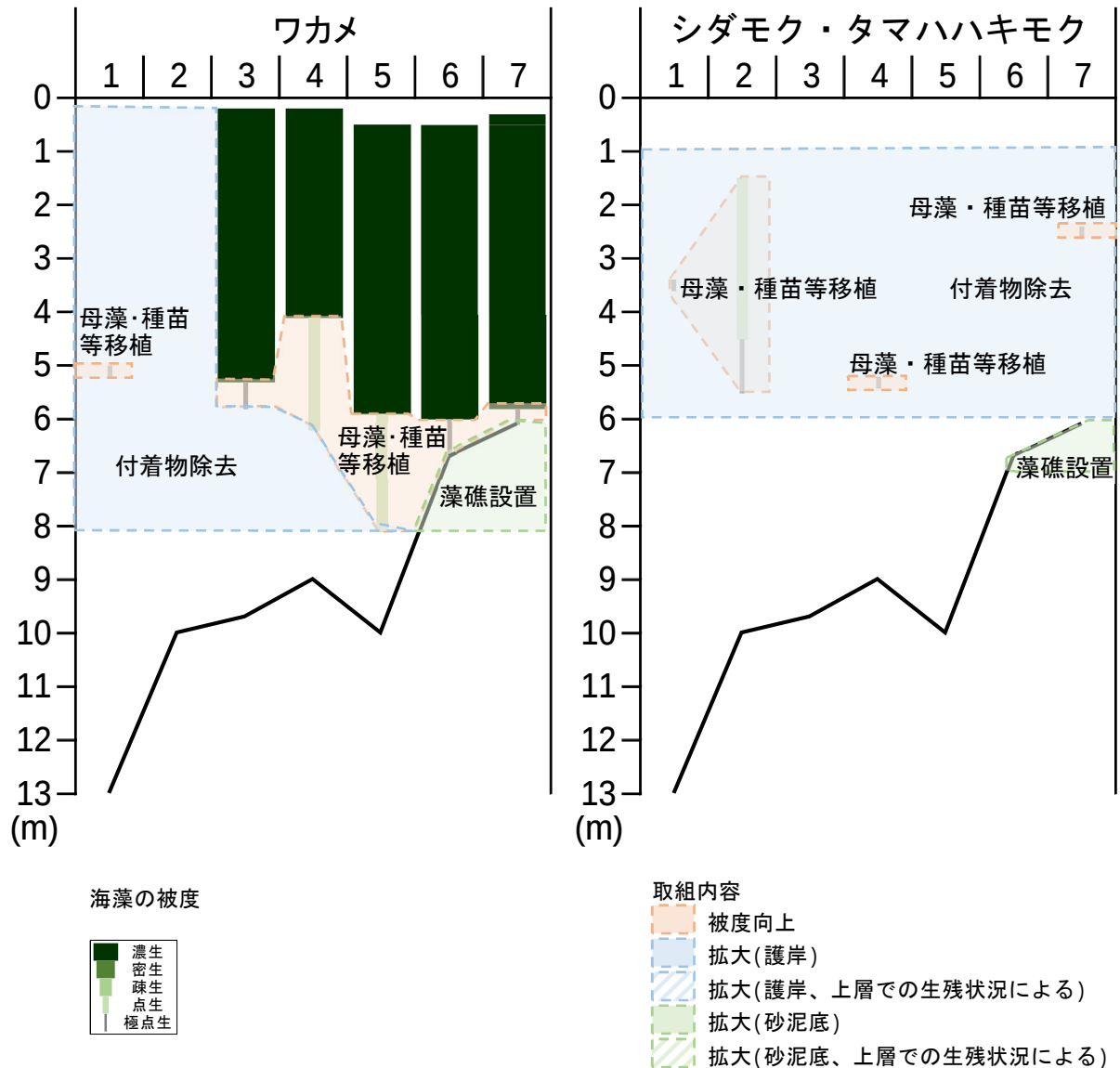
新浜地区における藻場造成を行うにあたり、関係機関と調整内容を表 5.4.4-10 に示す。

表 5.4.4-10 新浜地区での作業に係る主な関係機関と調整内容

主な関係機関名称	調整内容
大阪府漁業協同組合連合会	・ 事業概要の説明・同意（必要に応じて、忠岡漁業協同組合等）。漁業等の操業エリアであるため、事業概要等の説明が必用。また、特別採捕許可を申請する場合には同意書が必要。 ・ 作業船等の調達 作業船及び警戒船の調達の相談窓口
岸和田海上保安署	・ (工事・作業又は行事) 許可申請 藻場創出にあたり、護岸及び近傍で移植や基質設置等の作業や調査を行う場合に必要。 ・ 申請先：岸和田海上保安署(阪神港長)
大阪府環境農林水産部	・ 特別採捕許可申請（大阪府環境農林水産部 水産課） 母藻の確保のため海藻採取を実施する場合に必要。
大阪港湾局	・ 水域等占用許可申請書（大阪港湾局泉州港湾・海岸部施設管理運営課施設管理運営） 藻場創出にあたって、護岸等を使用する場合に必要。

※大型の藻礁の設置や事業規模等により上記以外の調整が必要となる場合がある。

以上を整理し、新浜地区におけるワカメとシダモク・タマハハキモク（アカモク）の主な創出方法(案)を図 5.4.4-20 に、海藻の創出内容(案)を表 5.4.4-11 に示す。



※アカモクの母藻・幼体等が入手できる場合には、シダモクの代替種として扱う。

図中の創出方法を基本とし、その他の有効な方法を組み合わせることがより効果的となる。

図 5.4.4-20 新浜地区におけるワカメとシダモク(アカモク)・タマハハキモクの創出方法(案)

表 5.4.4-11 新浜地区における海藻の創出内容(案)

項目	内容			
創出候補種	ワカメ	シダモク(アカモク)	タマハハキモク	小型海藻
水深	水深 1～6m 程度	水深 1～3m 程度	水深 1～2m 程度	大型海藻創出箇所
範囲	全域		北側(No.1～2) 中央(No.5)	(大型海藻創出箇所)
場所	既設護岸 護岸前面の砂泥底			
方法	被度の向上 ・ オープンスポアバッグ等による母藻の移植 ・ 増殖用の基質の設置と種苗の取り付け・オープンスポアバック等 拡大(護岸) ・ 付着物の清掃等・砂泥の除去等(底層付近) 拡大(砂泥底) ・ 藻礁等の設置 その他 ・ 海藻の移植の際には、食害の影響を十分考慮する			カバノリ、ススカケベニ、タオヤギソウ、ベニスナゴ、ムカデノリといった小型海藻が大型海藻の基盤整備等に伴い増加することが見込まれる。
創出時等の注意事項	全域：大津川等の河川の影響を受ける可能性があるため、表層の塩分に注意する。 全域：砂の移動・堆積による影響を受ける可能性があるため、施工時期、創出箇所の砂泥底からの高さ、基質の形状等に注意する。 護岸前面の基盤の設置：海藻の成熟時期(ワカメ、シダモク(アカモク)、タマハハキモク：春頃)の前に設置することが望ましい。また、設置と併せてオープンスポアバック等や種苗の取り付けを行うことも効果的である。			
維持管理	付着物の増加：移植等を行った箇所が創出候補種以外に覆われる場合には、基質表面の掃除を行う。 砂の堆積：移植等を行った箇所の周囲に砂が堆積する場合には、基盤表面の砂泥の除去を行う。 食害対策：アイゴ・クロダイ等の食害を受ける場合に、創出した藻場を網等で囲い、核藻場とする等の対策が必要と考えられる。			
実施にあたっての調整等	護岸での設置・作業に関して岸和田堺海上保安署に、護岸の使用に関しては護岸管理者の大阪府に、事業概要の説明や作業船等の調達、海藻を採取する場合の同意書については大阪府漁業協同組合連合会に、その他必要に応じて忠岡漁業協同組合他の関係機関と事前に調整し、必要に応じて手続きすること。 特に、藻礁を設置により水深変化が生じる場合には設置前後に水深測量が必要となる場合がある。			